

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20510238

研究課題名（和文）グローバル化時代の外国人労働者とホームランド
—デカセギ・ブラジル人の事例—研究課題名（英文）Foreign workers and their homeland in the age of globalization
—A case of Brazilian workers in Japan—

研究代表者

三田 千代子 (MITA CHIYOKO)

上智大学・外国語学部・教授

研究者番号：40092340

研究成果の概要（和文）：日本の外国人就労者である日系ブラジル人は、ホスト社会、エスニック集団、ホームランドの3社会に同時に存在している。エスニック集団はホスト社会に組み込まれたものであるが、ホームランドとの繋がりを維持しているのは、IT機器や携帯電話といった容易で安価で迅速なコミュニケーション手段の普及の結果である。すなわち、物理的に存在しているホスト社会は、ブラジル人就労者にとっては絶対的空間であり、種々のコミュニケーション手段によって社会的関係を維持しているホームランドは相対的空間である。この2つの空間に人が生きているということは、グローバル化時代だからこそ可能となったことである。

研究成果の概要（英文）：Japanese Brazilians as foreign workers in Japan have been living concurrently in three dissimilar societies, namely those of their host country, their ethnic group, and their homeland. Their ethnic group however is incorporated within their host society of Japan, and what enables their maintenance of links with their homeland is the widespread proliferation of inexpensive electronic devices, such as personal computers, cellular phones, videophones, and so on. That is to say, the host society they physically inhabit would constitute for them an absolute space, while the homeland with which they maintain links through utilizing of a variety of communication devices, would be for them a space that is relative. The fact that individuals are able to subsist thus in two different spaces, is an outcome of nothing less than globalization.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：文化人類学、社会学、民俗学、教育学、宗教学

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：外国人労働者、デカセギ・ブラジル人、グローバル化、ホームランド、ホスト社会、人の移動、エスニック集団、宗教生活

1. 研究開始当初の背景

1980年代半ば以来、外国人労働者の増加を経験してきた日本では、国内のブラジル人労働者やその家族の問題に関する経済、社会、文化、法律といった多様な分野から研究がなされてきた。これら成果はいずれも日本の外国

人研究という意味で、日本研究に留まる。外国人労働者としての移民を挟んでの送出国ホームランドと受入地のホスト社会との社会文化的な相互作用に関するダイナミックな研究は、日本ではほとんどなされてこなかった。そこで、ホームランドとホスト社会の

相互関係を把握することが、グローバル化時代の国境を越えたダイナミックな人の移動の理解に資することになるとして、本研究が意図された。

2. 研究の目的

日本におけるブラジルからの就労者（「デカセギ」と呼ぶ）のホームランドとの関係およびそのホームランドの社会変化を把握することを目的とする。本調査により、グローバル化時代の国境を越えての人の移動とそこに展開するホームランドとの社会・文化・経済の諸変化を捉え、日本のグローバル化時代の具体的事例を提示する。

3. 研究の方法

(1) 参与観察

①ホスト社会日本では浜松市、豊橋市、豊田市、大泉町のブラジル人及びコミュニティの調査。

②ホームランドとのブラジルではサンパウロ州のバスタス市とサンパウロ大都市圏における「デカセギ」経験者及びその家族の調査。

(2) アンケート調査

①愛知県6市（豊田、岡崎、豊橋、安城、小牧、名古屋）、岐阜県2市（加古、大垣）、滋賀県2市（湖南、長浜）、静岡県5市（浜松、磐田、袋井、掛川、富士）、長野県上田市、三重県2市（四日市、鈴鹿）、群馬県大泉町にて、2009年7月13日—8月4日にブラジル人及びペルー人総数683人に社会経済生活に関するアンケート調査。

②サンパウロ大都市圏にて「デカセギ」経験者あるいはその家族183人に対して、日本での生活及び帰国後の生活について、2010年8月30日—11月15日にアンケート調査。

(3) 調査結果の分析、考察

4. 研究成果

(1) 被調査者の属性

①男性の割合が高い「デカセギ」

グローバル化時代の人の移動の特徴の一つとして、女性化が指摘されているが、日系ブラジル人の場合は、就労を目的に一時的に日本に滞在することを意図して来日していることから、男性が6割を占めた。とはいえ、女性が4割を占めているということは、人の移動の女性化というグローバル化時代の現象も窺われた。

②「デカセギ」の中心的な年代

稼働力の大きい30—40歳代が被調査者の6割以上を占める（図1参照）。

③「デカセギ」の主な出生地はサンパウロ

26州からなるブラジルで、デカセギ・ブラ

ジル人の半数以上はサンパウロ州出身者で、しかも都市生活者である。

④相対的に高い学歴

25歳以上のブラジル人の平均就学年数は7.6年（2007年）である。これに対し被調査者のデカセギ・ブラジル人の3割以上が就学年数11年あるいは12年の高校修了者、就学年数15年以上の大学卒業者は2割を占めていた。ホームランドで大学卒業後、企業の営業職や事務職に就いていた者が、ホスト社会日本でそのキャリアを活かされることはほとんどない。

(2) ホスト社会日本の生活

①就労期間

ホスト社会滞在者とホームランドに戻った者の調査結果をまとめると、就労者の3割から6割弱が、ホスト社会での就労期間が1年以上10年未満であった。ホスト社会での滞在期間が15年以上に及ぶものは被調査者の4分の1を占めていた。つまり、デカセギ・ブラジル人は、10年未満で帰国するか、15年以上ホスト社会に留まるかに分かれることになる。

ホームランドに戻った理由、すなわち「蓄財を果たした」「ブラジルで仕事が見つかった」「日本での失業」といった明確な理由を記したものは、3割強に過ぎない。ホームランドで好条件の就労が可能となると、ホームランドに戻ると推察される。

②デカセギは熱心な送金者

被調査者の6割はホームランドに送金していた。ホームランドのブラジル以外で生活している海外在住ブラジル人のうち、日本に滞在するブラジル人はおよそ1割で、このデカセギ・ブラジル人がホームランドに送金している総額は世界各国のブラジル人が送金している総額の3分の1に当たる。デカセギはホスト社会で勤勉な就労者であると同時に、米国や英国の場合と異なり、日本では合法的な就労外国人であることの結果である。

③エスニック・コミュニティ

食料品店、生活雑貨、レストラン、旅行会社、携帯電話会社、銀行、就労斡旋業、新聞、法律相談、相互扶助団体、教育機関など、幅広い業種のエスニック・ビジネスが展開している。さらに相互扶助団体も組織化されており、職場では日本語が必要でも、それ以外の生活ではポルトガル語による「ブラジル式の生活」が可能である。

キリスト教会はエスニック・コミュニティの構成要素として重要である。宣教師はホームランドから派遣されているか、コミュニティ内の伝道者が活動を展開しており、教会はホスト社会とホームランドを繋ぐ役割を担っている。

④日本での相談相手

悩み事を相談する相手は、「日本にいるブ

ラジル人の友人」あるいは「日本にいる家族や親族」である。同時に地方行政の窓口でホスト社会の制度上の問題を相談している。ホスト社会の言語運用能力に限界がある外国人就労者がホスト社会の行政機関から必要な情報を入手しているということは、地方自治体が通訳者や翻訳者を配置してブラジル人就労者に対応できる体制を整えているということになる。

(3) ホームランドとの繋がり

① ホームランドの情報入手法

被調査者の7割以上がPCを使用してホームランドの情報を入手し、6割以上はホームランドのテレビや雑誌を利用し、友人や知人からの情報は4割以上に上った。ホームランドの情報源を持たないとするものは1%にも満たず、ホームランドの情報を積極的に入手しようとする姿勢とそれを支えているのはIT機器の普及であった。

② ホームランドの親族・友人との連絡方法

ホームランドと連絡をとりあっていないものは被調査者の2%に達しておらず、ほとんどのデカセギ・ブラジル人はホームランドと頻繁な連絡をとりあっている。「手紙」の利用者もいるが、その主な手段は、PCメール、PC電話、携帯電話といったIT機器であった。

③ ホームランドでの再適応

再適応に苦労したと答えた者は、被調査者の4割強で、そのうち就労問題がおよそ半分を占めていた。その他は「生活のリズムの違い」「ホームランドの変化」「友人関係」といった時間が解決する問題であった。「教育の問題」を訴えた者がいた。学齢期の子どもを連れて帰国した者27人のうち、教育の適応に問題を抱えたものは6人であった。これは、問題があるとして保護者が認識している数値であるので、実態より低い数値である。社会化の一過程である教育が、依然国家を単位とした社会の成員の育成に留まっている現在、第一次社会化の過程にある年少者が、ホスト社会で過ごす時間が長ければ長いほど、就労者である親の世界、つまりホスト社会とホームランドのふたつの社会空間によって形成されている世界と子どもの世界とには齟齬が生じることになる。

(4) まとめ

① 日本のブラジル人就労者は、永住ではなく、ある一定期間の就労を目的にホスト社会に滞在している。

② 外国人就労者としてデカセギ・ブラジル人は日本の地方社会に多言語多文化の存在を認識させかつ体験させた。

③ デカセギ・ブラジル人はホスト社会日本でエスニック・コミュニティを形成している。この社会集団がホスト社会とホームランドを繋ぎ、さらにIT機器を用いることによっ

て、デカセギ・ブラジル人はこれら二つの社会空間に同時存在することが可能となっている(図2参照)。

グローバル化時代に迅速で安価なコミュニケーション手段が普及し、越境が容易となっても、親世代と子世代の心象世界の乖離を埋めることは依然困難である。

図1 年齢分布(2009年)

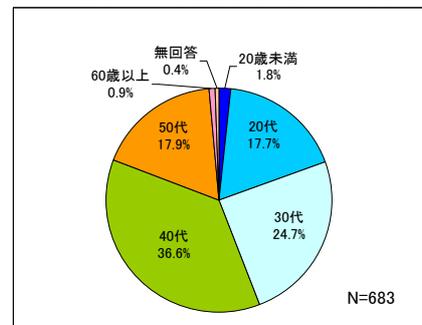
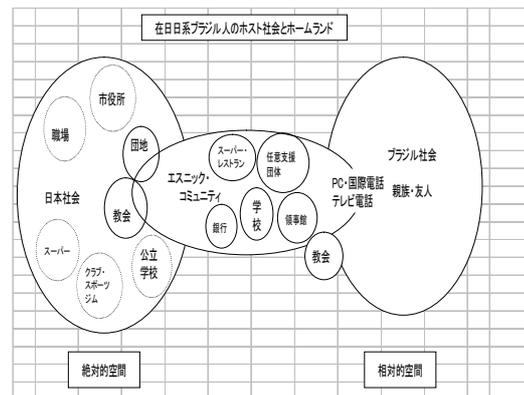


図2 デカセギ・ブラジル人の世界



執筆者作成

(5) 貢献と今後の展望

① 日本の特定の地域に留まらないデカセギ・ブラジル人の生活の諸側面を数値化して示したことは最初の試みである。

② 越境する人々の世界をダイニクにかつ可視的に把握したことは最初の試みである。

③ デカセギ・ブラジル人のホスト社会とホームランドを同時にかつ有機的に結び付けたことにより、日本の外国人就労者研究の新しい視点をもたらした。

④ 21世紀あるいはグローバル化時代の新しい世界観の方向性提示した。今後はこの精緻化が必要である。

⑤ 日本におけるブラジル人以外の外国人就労者のホームランドとホスト社会の繋がりに関する同様の調査研究をすることにより、日本社会の外国人の姿の多様性と外国人就労者のマイノリティとしての問題を指摘することが可能となる。さらに、日本以外の外国人就労者研究と比較することによって

外国人に対する日本社会の新しい視点を開くことができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① 三田千代子「デカセギ現象 25 年—日本とブラジルの社会変化」、『人権と部落問題』、査読無、通巻 811 号、2011 年、16—28 頁。
- ② 小池洋一「労働市場の非正規化と日系人労働」三田千代子[編著]SUP 上智大学出版、『グローバル化の中で生きるとは—日系ブラジル人の暮らし』、2011 年 9 月、280 頁 (収録予定)
- ③ 加藤博恵「外国人集住率が一五%を超える大泉町」同書収録予定。
- ④ 堀永乃「多文化共生社会に資する地域の取り組みと課題—浜松の事例」同書収録予定
- ⑤ 高木和彦・松尾隆司「経済危機以降の南米日系人の就労と生活変化—滋賀の場合」同書収録予定。
- ⑥ 拝野寿美子「在日ブラジル人の子どもたちの教育とブラジル人学校」同書収録予定。
- ⑦ 山ノ内裕子「日系ブラジル人の移動とアイデンティティの形成—学校教育とのかかわりから」同書収録予定。
- ⑧ 拝野寿美子「在日ブラジル人二世世代のホームランド—自ら選びとる『生きる場所』」同書収録予定。
- ⑨ 山田正信「日本のブラジル人の宗教生活—エスニック・ネットワークの繋留点としてのブラジル系プロテスタント教会」同書収録予定。
- ⑩ 柳田利夫「在日ペルー人の生活戦略—在日ブラジル人との比較を通じて」同書収録予定。

[学会発表] (計 10 件)

- ① 三田千代子「トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化—過去から未来に向かって」2011 年 3 月 5・6 日、国際交流基金・日本移民学会、早稲田大学。
- ② 三田千代子「在日ブラジル人のホスト社会とホームランド—アンケート調査から」2010 年 11 月 6 日、日本社会学会、名古屋大学。
- ③ 三田千代子「変容する日系社会」2010 年 9 月 2 日、サンパウロ人文科学研究所定例研究会、サンパウロ人文科学研究所。
- ④ 三田千代子「外国人就労者とホームランド—在日日系ブラジル人の事例」、VIII Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil, 2010 年 8 月 27 日、ブラジリア大学。
- ⑤ 三田千代子「デカセギ送出地バストスの

社会・経済生活の変化」2009 年 11 月 28 日、ラテンアメリカ政経学会、立命館大学。

- ⑥ 三田千代子「在日ブラジル人の社会経済生活—アンケート調査から」2009 年 10 月 17 日、慶應義塾大学東アジア研究所研究会、慶應義塾大学。
- ⑦ 三田千代子「デカセギ送出地バストスの社会・経済生活の変化」2009 年 5 月 31 日、日本文化人類学会、大阪国際交流センター。
- ⑧ 山ノ内裕子「デカセギによる教育機能の変容—ブラジル日系社会と在日ブラジル人社会の調査を通して」2009 年 5 月 31 日、日本文化人類学会、大阪国際交流センター
- ⑨ 拝野寿美子「移民二世世代による『ホームランド』の選択で」2009 年 5 月 31 日、日本文化人類学会、大阪国際交流センター
- ⑩ 三田千代子「ブラジルの日本人、日本のブラジル人」2008 年 11 月 9 日、シンポジウム在日ブラジル人のこれからの 100 年、女性の仕事館。
- ⑪ 三田千代子「ブラジル日本人移民の百年」2008 年 10 月 26 日、日伯交流年記念連続シンポジウム、JICA(横浜)。
- ⑫ 三田千代子「ブラジル日本移民研究の「空白」と「断絶」」2008 年 10 月 25 日、国際会議ブラジル日本移民 100 年の軌跡、立教大学。

[図書] (計 4 件)

- ① 三田千代子[編著]SUP 上智大学出版、『グローバル化の中で生きるとは—日系ブラジル人の暮らし』、2011 年 9 月 (予定)、280 頁。
- ② 三田千代子「日本移民の「空白」と「断絶」を超えて」丸山浩明[編著]明石書店、『ブラジル日本移民—百年の軌跡』2010 年、81—83 頁。
- ③ 三田千代子、不二出版、『「出稼ぎ」から「デカセギ」へ—ブラジル移民 100 年にみる人と文化のダイナミズム』、2009 年、296 頁。
- ④ 三田千代子「ブラジル社会の多様性とその承認」畑恵子、山崎眞次 (編著)『ラテンアメリカ世界の言葉と文化』、成文堂、2009 年、37—59 頁。

[その他]

ホームページ等

<http://pweb.cc.sophia.ac.jp/cmmita/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三田 千代子 (MITA CHIYOKO)
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：40092340

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

小池 洋一 (KOIKE YOUICHI)
立命館大学・経済学部・教授
研究者番号：40328018

柳田 利夫 (YANAGIDA TOSHIO)
慶應義塾大学・経済学部・教授
研究者番号：40119029

山田 正信 (YAMADA MASANOBU)
天理大学・国際学部・准教授
研究者番号：70434975

山ノ内 裕子 (YAMANOUCHI YUKO)
関西大学・文学部・准教授
研究者番号：00388414

拝野 寿美子 (HAINO SUMIKO)
神田外語大学・国際言語文化学科・非常勤
講師

(4) 研究協力者

田中祐司 (TANAKA YUJI)
立命館大学・経済学部・教授
研究者番号：40217089

柴崎敏男 (SHIBAZAKI TOSHIO)
三井物産株式会社環境・社会貢献部

田村エミリオ (TAMURA EMILIO)
異文化を伝える会 (浜松) 代表

加藤博恵
群馬県大泉町役場企画部国際協働課主幹

堀永乃
公益財団法人浜松国際交流協会主任

高木和彦
特定非営利活動法人多文化共生マネー
ジャー全国協議会副代表

松尾隆司
群馬大学教育学部附属学校臨床総合セン
ター助教

松井 謙一郎

国際通貨研究所主任研究員

渡会 環
愛知県立大学助教